

Title	西田幾多郎の衝動概念 — 異邦の経験をめぐって
Author(s)	森野, 雄介
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72471
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (森野 雄介)

論文題名 西田幾多郎の衝動概念 — 異邦の経験をめぐって

論文内容の要旨

本論は西田幾多郎の哲学を考察の主題とする。西田幾多郎（1870-1945）は、明治から昭和にかけて活動した日本の哲学者である。

西田の哲学を考察するにあたって、「衝動」概念に着目する。西田の「衝動」概念は務台理作の研究を除いて、これまでの研究では重要な論点として扱われてはこなかった。だが、本論の見立てでは、この概念は認識論、行為論、時間論、空間論、存在論の根幹として提示されており、西田の哲学を考察する上で、最重要概念の一つであると考えられる。この「衝動」概念の考察を通じて、本論はこれまでの研究では論じられてこなかった仕方で西田の哲学の全容を提示することを試みる。

さて、本論は序論と結論、および三つの部から構成されている。

序論において、私たちはこれまでの西田研究のなかで前提とされてきた「東洋／西洋」の区分という前提を疑うところから議論を開始する。そしてこの議論を通じて、本論の基本的な読解方針が提示される。

第1部は、前期から中期にかけて西田が提示する基本概念の内実、および、それらと「衝動」概念との連関を考察する。

第1章は西田の最初の著作『善の研究』（1911）を考察する。この章の考察対象は、この著作で提示される概念「純粹経験」の内実と「衝動」概念の位置付けである。考察にあたって、とりわけ私たちはこの著作における「現在」という時間性をめぐる西田の考察を追っていくこととなる。そして、この考察を通じて、上記の二つの対象の性質を明確化していきたい。

第2章および第3章は、それぞれ1917年の西田の著作『自覚における直観と反省』を考察する。そして、第2章・第3章では、この著作で提示される「自覚」の概念の内実を確認していくこととなる。

第2章は、「自覚」概念の持つ時間性・空間性と衝動の結び付きに焦点を当てる。西田はこの二つに関する議論を、新カント派とベルクソンの経験論の調停という仕方で案出している。この論点に着目することによって、私たちは西田の哲学史上における位置を定めることができるだろう。また、「自覚」概念は「行為」と強く結びつく。そして、この「自覚」と行為の関係性から、この著作における「衝動」概念の内実を明らかにできるだろう。

第3章では、「自覚」の持つ内的な構造を主題とする。そして、考察にあたって新カント派のヘルマン・コーヘン受容が西田の感覚論に及ぼした影響に着目する。この事柄を考察することで、『自覚における直観と反省』における「自覚」概念の持つ内的な構造の明示的な提示を試みている。

第4章の考察の主題は西田が1927年に案出する「場所」概念となる。そして、この考察にあたって、1927年に先立つ『意識の問題』（1920）の議論を参照したい。その理由は、この著作ですでに「場所」概念の萌芽が現れており、そして、この「場所」概念の萌芽は前期哲学の独自の立場と結びつくと考えられるためである。とりわけ、私たちはこの著作で現れる西田の立場をパースペクティヴィズムとして捉え、その立場と個人的経験の成立に関する議論の結び付きを考察する。そして、そのことを通じて西田の前期哲学の独自性と『意識の問題』における「衝動」概念の内実を明らかにしたい。

第1部の最後の章となる第5章は『働くものから見るものへ』（1927）で提示される「絶対無の場

所」という存在論的な根底を主題とする。私たちは田辺元の西田批判を手引きに「絶対無の場所」概念の内実と行為との結び付きを考察していく。そして、この章の議論を通じて、私たちは西田が提示する存在論的な根底に関する議論のなかに、無底と受容性という二つの「無」が現れていることを示していく。

第2部は、西田の中期著作『無の自覚的限定』（1932）を主題とする。

第6章において、私たちは『無の自覚的限定』における「衝動」概念の位置の明確化を試みる。そして、この明確化のために、私たちは西田がこの著作で提示する形而上学的な瞬間をめぐる議論に着目する。この著作のなかで、西田は時系列およびあらゆる根拠に先行する現在の瞬間を提示する。第6章は、この現在の瞬間が身体と結びつくものであり、そして現在の瞬間は作用としては「衝動」として現出することを提示する。

第7章は、『無の自覚的限定』における個人的経験の成立のプロセスに関して考察する。とりわけ、この章の考察は第5章で提示される「受容性」と「無底」という二つの無を用いて、この著作の西田の議論を分節することによって行われる。とりわけ、上記の観点に関して、第7章は瞬間の現出である「衝動」と認識論、時間論、空間論、身体論との関係性を考察する。また、ここで私たちは根底的に偶然的であり離散的な「事実」という後期には見られなくなる論点が明示的に現れている点に着目する。

第8章において、私たちは後期西田を批判的に検討していく。私たちにとって後期の西田の抱える問題点は、万物に共通する唯一の事実を関係の媒介者として措定する点に由来する。この唯一の事実の導入は、後期西田の持つさまざまな問題点の原因となるのだが、第8章はこの導入によって浮上する種々の問題点を検討していく。そして、この問題点を回避する論点が、『無の自覚的限定』の他者論のなかに存在することを解明する。

第3部は西田幾多郎の後期哲学を持つ理論的可能性を考察する。この部は二つの章から構成されている。

第9章は、後期西田の主要概念の内実と「衝動」概念の位置付けを考察する。とりわけ、第1節では「絶対矛盾的自己同一」、「行為的直観」、「制作」の三つの概念を検討していく。そして、第2節において、後期西田における衝動概念の位置付けを考察していく。また、この節の主題は衝動概念が個物と個物の関係の関係において果たす役割の解明となる。

本論の最後の章となる第10章は、後期西田における「形」の概念に焦点を当てる。この「形」概念のなかに、西田が十分に展開することのできなかつた可能性が存すると考えられるためである。私たちは、自律的である個物と個物の関係性をめぐって、あるコスモロジーが西田の後期哲学のなかに伏在することを提示する。そして、その議論を後期の技術に関する議論の解釈を通じて、西田の哲学の持つ理論的な可能性を示すものとして具体化することを試みる。

結論において、私たちは本論が行なった議論の総括と西田の全時期を通じた「衝動」概念の持つ特質の明確化を行う。そして議論を通じて、本論は「衝動」が西田の哲学において最も重要な概念のひとつであることを示すことができるだろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (森野雄介)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 檜垣立哉
	副 査 教授 村上靖彦
	副 査 准教授 野尻英一
	副 査 教授 (立正大学) 板橋勇仁

論文審査の結果の要旨

学位申請者森野雄介君の論文は、日本の哲学者西田幾多郎の思考全般にかんして、「衝動」概念を軸として読み解くものである。あわせて申請者は、原初的であるが超越論的に表現を形成するこの「衝動」の概念に、ある種の「異邦性」を読み込み、それにより、西田と京都学派に付されがちな特定の政治性に対し、現代的な視点からの別の読み方の提示を試みている。それは具体的にいえば、西田が「歴史的世界」として定式化したもの自身に西田の観点から再考を迫り、とりわけ後期のコスモロジー的議論に離散した個体のあり方に、別の読み方を提示するという意欲的なものである。その意味で、申請者は西田のテキストを丹念に読解するとともに、その読解の軸を後期の表現論にもとめ、そこにおける政治性の議論に一石を投げかけるものであるといえる。

従来より西田研究は、純粋経験論を中心とする前期、自覚論をへて場所の議論を介しつつ絶対無に至る中期、そして中期後半における絶対無の扱いをめぐる事態をうけた、個体と個体との逆対応的世界の描出をなす後期と区分され、そのいずれの時期かに力点が置かれるものが多かった。また同時に西田が後期において、当時の大東亜共栄圏の理論的支柱を与えるかのような文章を書いた事実もあり、その弟子がいわゆる「近代の超克」座談会に加わっていたこともあいまって、西田自身の思想のリベラル性にもかかわらず、その政治性において批判を受けることも多々あった。そしてそれ自身が西田を取り巻く京都学派のある種の思考の帰結であるという批判もまた多く寄せられもした。

これに対し、申請者は、まずは衝動概念という現在の深みという関連する西田の議論を軸に、それが各時期を分断するのではなくさまざまなかたちを変えながら西田の議論の中で一貫して主要な主題であるということ徹底しておこない、そしてこの衝動概念自身から導き出される、個物と個物のネットワーク性と、その人間にとどまらないエージェントのあり方を介在させること（そこにはブルノ・ラトゥールや、近年の思弁的实在論の議論も援用される）によって、確かに西田に存在する「歴史的世界」のあり方に、しかし西田の議論に即したかたちで別のヴィジョンをぶつけようとする野心的な意図をもっている。これが「衝動」のもつ「異邦性」の含意に関わってくる。

本稿は上記の議論を、それぞれの西田の時代に即して、序論と3部構成9章だてと、結論部から成り立つものである。

序論では、西田の位置にかんして先に述べたような総体的な問題定期が展開され、東洋と西洋という安直な対比に収まらない西田のあり方が、衝動論と異邦性というキーワードとともに提示される。

第一部では、第1章において初期の『善の研究の』純粋経験における現在をめぐる時間論がW. ジェームズとの対比などにおいて提示される、第2章及び第3章においては『自覚における直感と反省』における自覚論が確認され、新カント派やバルクソン、そしてとりわけヘルマン・コーヘンの影響において自覚がもたらす現在の意味が深められる。第4章および第5章においては『意識の問題』における場所概念と『働くものから見るものへ』に至る場所論の系譜が辿られ、パースペクティブ主義としての西田の議論が、後期にまでつながるものとして提示される。そこでは無を無底と受容性という二側面から定位し、ただ神秘化される無の位相ではなく、行為と世界の表現的作成に向かうそのあり方がたどられている。

第二部は中期の代表的著作である『無の自覚的限定』を軸に、衝動概念が身体と連関すること、そしてそれが世界に「いま・ここ」という独自のパースペクティブの原点になること、また自愛、欲求、欲望とつながっていく西田の議論の展開が記述されている。第6章、第7章において描かれるこの議論が論考全体の軸をなしているとみて

とることができる。そして第8章では、西田後期の批判に向けての論点が『無の自覚的限定』のなかの「汝と私」の議論において見出しうるものが指摘される。

第三部はそれら受けての後期西田への批判と、あくまでも西田に即したその書き換えの可能性を描くものである。第9章では後期の西田の概念が制作と表現に向かうことを指摘し、第9章における「形のコスモロジー」という主張へとつなげていく。西田自身が「実在のレリーフ」と描くこの世界は、個物と個物との連関とそこでの表現的な世界とされるが、それがあくまでも「歴史的世界」という収斂を見せるのではなく、個物と個物とのネットワークの関係そのものが人間のそれを超えた動物やものとの連関を含意すること、そこでの衝動の異邦性のあり方が明示されるものになる。

以上のように展開される申請者の論文はオリジナルな論点にとみ、時には従来の読解をはみ出す部分はあるが、これまでの西田研究のあり方をよく咀嚼し、注において研究史的蓄積を明確にし、西田研究および日本哲学研究に対して貢献をなすものであることは明らかであるとおもわれる。また論考に収められた各章は、原型としては様々な学会で発表され、あるいは査読論文として通過したものであり、英語での発表の論文も含まれている。これらを一貫して読めるように書き直されたのが本論考であり、各主張において査読等の客観的な評価を得ていること、積極的に日本哲学の成果を英語で発信した結果が結実したものであることも付け加えておく。

よって本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。